

(1)小麦の赤さび病

近年、秋まき小麦主要品種の「きたほなみ」の他、「キタノカオリ」などの品種でも赤さび病の多発事例が認められ、赤さび病の発生が少ないとされる「ゆめちから」でも防除が実施される状況となっている。令和6年度は、これまで発生が比較的少なかったオホーツク地域や太平洋側地域でも秋まき小麦の赤さび病が多発するとともに、道央地域では春まき小麦「春よ恋」でも多発した。近年の多発要因として越冬菌量の増加が考えられており、令和6年産小麦における多発や令和6年秋まき小麦は種後も高温に経過したことなどから令和7年春の越冬菌量は多くなると推測されるので、令和7年度の発生に注意が必要である。

本病に対する防除対策は、発生リスクが高いほ場では、1回目の散布を次葉展開期から止葉期に効果が高く残効の長いインピルフルキサム水和剤Fあるいはフルキサピロキサド水和剤Fで行い、開花始に2回目の散布として赤かび病にも効果的なキャプタン・テブコナゾール水和剤あるいはプロチオコナゾール水和剤Fを用いることで効率的に防除できる。令和7年度は、令和6年度の発生に応じて、これまで発生リスクが高くなかった地域でも前述の防除を検討する必要がある。また、前述のとおり病原菌の越冬量が多いと考えられる地域では、初発が早まることも想定される。本病は散布タイミングが遅れると、十分な防除効果が得られないので、防除適期を失しないようにする。

なお、1回目散布の薬剤選定に当たっては、フルキサピロキサド水和剤Fは散布時に発病が認められる葉には効果が劣るため、散布時に次次葉（止葉の2葉位下の葉）に発病が認められる場合はインピルフルキサム水和剤Fを使用する。



写真 葉の症状(道総研 原図)